

## 沖縄と如何に向き合うべきなのか？

山本英夫

昨年二〇一二年、沖縄は「日本復帰40年」を迎えました。しかしオスプレイの強行配備や辺野古埋め立ての動きが顕著になりました。沖縄が「国内軍事植民地」であることがはっきりしたのです。九六年以降の「普天間基地撤去・基地の整理縮小・負担軽減」の全部がウソでした。このことは、この一六年間を振り返れば、否定しようもない歴然たる事実です。

安倍政権は、三月二二日に「主権回復の日」式典の公表、三月一五日に「TPPへの参加」表明、三月二二日に「埋め立て申請」と三本そろい踏み踏み攻撃をしかけてきました。もつともこうした動きを裏読みすれば、日本が米国の「従属国」であることはミエミエです。しかしながら、安倍政権は沖縄を踏みじると宣言したのだと、わたしは考えています。ここでは「主権回復の日」については別稿に譲ります。例えばTPP。わたしはこの報道を宮古島で聞きました。辺りはサトウキビ畑。これが壊滅したら、農業が潰されるにとどまりません。島の暮らし・地域社会そのものが成り立たなくなるでしょう。沖縄島と宮古・八重山の格差はさらに拡大します。住民は減り、自衛隊が増える。目に見えるようです。

辺野古への基地建設も米国によるグアム・豪州・ハワイと重ねて、対中国軍事包囲網形成の一環です。それに悪乗りしているのが安倍君。この機に乗じて、自衛隊を「国防軍」にのし上げようとして、米軍との共同使用・共同演習を通して、侵略能力を高めようと、「尖閣・領土ナショナリズム」を煽り、米国の先を行こうと先走るありさまです。

ここで問題は私達「日本人」(ヤマトンチュ)にかえてきます。あなた方は沖縄にどう向き合おうのですか？ と。

東京の集会にてしていると、沖縄から来た報告者に、こんな質問が目立ちます。「仲井真知事は大丈夫なのですか？」と。埋め立て申請を承認してしまうのではないかと心配しての質問であることは分かります。しかしこの問いは「オール沖縄の闘い」の構造を理解していないから発せられるのです。沖縄の中には広範に反戦・平和の心が残っています。市民の激しい反基地抵抗運動がバネになりながら、沖縄の民意を押し上げ、選挙でもこの反基地の声を保

守勢力すら無視できないところに追い込んでいます。だから仲井真知事も、そう簡単に基地をうけ入れられません。これは歴史的現在のな力関係が作りだしているものです。だからこそ、仲井真知事に踏みとどまらせるのは、民衆がどれだけ基地ノリの声を集中できるかにかかっています。大丈夫かと予測を立てている暇はないし、私達が沖縄をここまで追い込んできたとの認識と自覚が足りないのです。

私達「日本人」は沖縄にどうむきあうのですか？ わたしはこう考えます。「日本」が沖縄に対して行ってきた歴史的現在のな責任を掛けて、闘うのです。現在の課題に向き合いながら歴史を学びなおすのです。そうすれば私たちの立ち位置がもつとはつきり見えてきます。

辺野古と高江、辺野古と与那国・石垣・宮古等、米軍と自衛隊、安保とTPP、基地と安全保障基本法、基地と憲法などなど。嫌でも「日本」の私たちの闘いが問われているのです。「領土ナショナリズム」との闘いは避けて通れません。政府・防衛省は、対中戦争に構えながら、沖縄を真っ先に最前線においやろうとしています。自衛隊は島嶼奪還作戦の訓練を積み重ねており、この六月にも米国で奪還・上陸作戦の日米共同訓練を予定しています。

\* \* \*  
わたしは今、五月一八日～二六日、写真展「命どう宝。海よ、森よ、暮らしを」を準備しています。これは辺野古の基地建設を問う写真展ですが、高江、普天間、与那国等にも光を当てます。この海と共に、この森と共に生きる暮らしへの転換を模索します。軍事は住民を守らず、生き物の持続可能性を踏みにじます。命どう宝を想起できればと願います。是非お越しください。

会場：東京・東中野のパオギヤラリー

時間：一時から一九時(最終日一七時)

問い合わせ先：電話 03 (5999) 0799

メール photoyamamoto@gmail.com,plala.jp

(やまもと・ひでお／フォトグラフィアー)